

嘉南大圳設計者 八田與一技師 (5)

—台湾で愛され日本人に知られていない偉大な土木技術者—

川 本 正 之

- | | |
|---------------------------------|--|
| (1) 姿を現した銅像 | (8) 李登輝氏は語る一米とサトウキビの増産で稼いだ外貨「八田さんの本当に大きな貢献は3年輪作だと思う」 |
| (2) この人の事を知ってほしい | (9) 撃沈—いつ死んでもお国のためなら本望じゃないか— |
| (3) 胸に抱く大計画 | (10) 陽光浴びる銅像—大変な恩恵をもたらした技術に境界はない— |
| (4) 家族とともに | (11) 追悼式典 (墓前祭) に参加して |
| (5) 前例なき工法 | (12) 民族を超えた土木技師 |
| (6) 二つの試練 | |
| (7) 不毛から肥沃へ—10年の月日を費やして嘉南大圳が完成— | |

(本文中敬称略)

(11) 追悼式典 (墓前祭) に参加して

昨年かの春、なんたいしゅう「嘉南大圳設計者・八田與一技師よいち」を調べてまとめてみた。その後も資料の収集に努めた。それが高じて、この度八田與一技師の命日5月8日の追悼式典(墓前祭)に合わせて、仲間3人と現地を訪れた。

前日に台北空港で飛行機を乗り継ぎ、高雄空港に到着した。気温は33度であった。旅行社の現地案内人「許信玄氏きんげん」(昭和8年生まれで小学校は日本の学校を卒業している)が出迎えてくれた。空港からマイクロバスで台南市の台南駅前のホテルに着いた。夜は海岸に近い海鮮料理を、案内してくれた。台湾の人口は約2,300万人、高雄市は150万人、台南市は75万人だそうである。

翌日8時半にホテルをマイクロバスで出発、途中許信玄案内人から「嘉南」というのは私は地名と思っていたが、そうではなく嘉儀かぎと台南との間の平野を「嘉南平野」というと教わった。約1時間弱で憧れの現地「烏山頭うざんとうダム」の八田與一の銅像と夫妻の墓前に着いた。写真しか見ていなかったが、そのものが目の前に表われ、まだ数えるほどしか人々がおらず、早速お参りをして写真に収めた。ただ新聞社のカメラマンやテレビカメラの人たちが、日本の代表者(後に分かった)にインタビューをしていた。

暫くすると、すぐ近くにあるリゾートホテルで、これから講演会が開催されるという話で、肝心のダムを見たかったが折角の講演と聞けば、急ぎ会場に駆けつけた。ホテルの中の会場は立派で空調も適度な温度で快適な場所であった。

10時から約2時間に渡り、八田技師を称える講演が、現地農田水利会会長や県知事を始め多くの方々から、さらに日本代表の金沢市田上公民館館長(八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会事務局長)中川外司トシ氏の答礼挨拶があった。(同時通訳を入れて)途中映画も上映され、工事中の場面も映った。

八田與一の長男晃夫氏(86歳)ご夫妻も、名古屋から出席されておられ久しぶりにお会いすることが出来て大変嬉しかった。病気で臥せっておられると聞いていたので、車いすとは言え大変良かった。今年は八田技師、生誕120周年記念ということもあり、会場は200名弱の人であった。途中日本から来た人は立って下さいと言われ、3分の1は席を立ったのではないだろうか。金沢からの人も結構いたし、親族親戚の人たちも10名余出席されていた。さらには大阪・京都・滋賀からの一団もいた。最後に長男晃夫氏が車イスから立ち上がり、謝辞を述べられ会場から万雷の拍手が起こった。

12時過ぎから、同ホテルで現地嘉南農田水利会主催の昼食会が開催され、私たちも(案内人・ドライバーを含む)ご相伴に与った。14時から追悼式が行われると聞いていたので、私たち3人は早めに席を立ち、待ちに待った烏山頭ダム・珊瑚潭を見学に出かけた。全長1,270mのダム天端を歩き、終点にある余水吐けまでを往復した。

戻って来たら、丁度式典の始まるころであった。尼僧2人の読経がながれるなか、晃夫氏ご夫妻が最前列で、

(下記の一部、写真および文章を引用・転載しました)

- 産経新聞「凛として」取材班、「凛として 日本人の生き方」、産経新聞(2005)
- 古川勝三：台湾を愛した日本人
- 司馬遼太郎：街道をゆく 台湾紀行
- 緒方英樹：「フォルモサの大地に残したものは」、日刊建設工業新聞
- 「新しい歴史教科書」、扶桑社
- 李登輝：「日本人の精神」、大学祭「三田祭」での講演予定原稿



写真—16



写真—17 今年も行われた八田與一を偲ぶ追悼式典（墓前祭）

次々と先ほど講演された人々が祭壇にお参りをし、私たちも代表者と一緒に頭を下げた。約1時間弱ほど行われ、現地の人たちがスイカを切って振舞ってくれた。テントが用意されていたが、途中にわか雨が降り、多少蒸し暑さを感じていたのですがスイカは格別美味しかった。

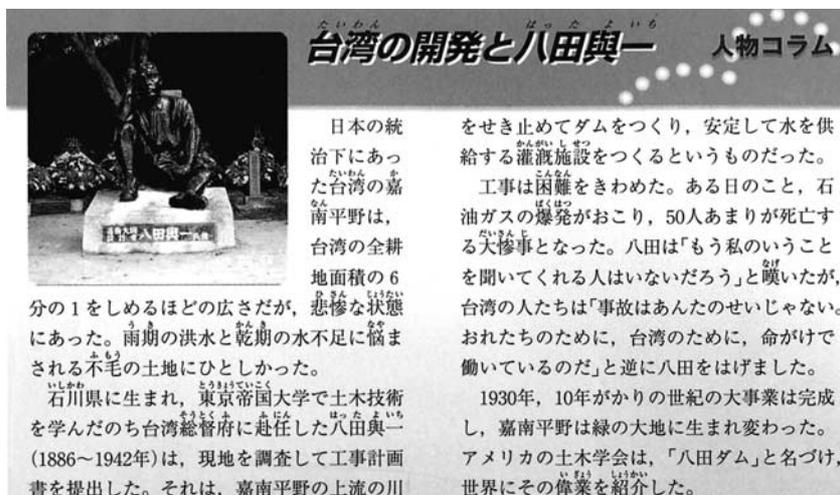
その後、私たちは殉工碑と記念館を見ていなかったの、許さんに案内してもらい、さらに外代樹さんが投身した取水口からの放水路（現：記念館のすぐ裏手）を見ることが出来た。最後に私の我が儘で無理を言って、再び八田與一の銅像とご夫妻のお墓に、日本から持参した線香とローソクに火を付けお参りして、悔いなく台南市のホテルに向った。

その夜、台南市の警察局の前にある水利会のコンサートホールで、「八田與一技師 120 歳記念音楽会」が、午後6時

40分から9時30分まで盛大に挙行された。昼間より大きなホールで、現地の若い人たちや式典に出席していた方々も大勢参加していた。勿論私も出席した。弦楽四重奏・中日歌曲合唱（嘉南農田水利会合唱団）・途中出演者による奇術も登場・世界名曲・台湾民謡・そして日本の長崎蝶々さん・上を向いて歩こう・最後は出演者、出席者全員で「夜來香」を歌って散会となった。司会も台湾のテレビで売れっ子のタレントで、大いに盛り上がった。

最後に色々と挨拶があったが、中川外司氏から、私は今年で連続22年であるが日本人の参加者が年々増えていることに喜びを感じている。また、嘉南農田水利会会長は、徐金錫氏が再任され、引き続き今後4年間務められることに決まったとの紹介があった。

今年の11月5日、金沢市今町の八田氏生家の前に生誕



台湾の開発と八田與一 人物コラム

日本の統治下にあった台湾の嘉南平野は、台湾の全耕地面積の6分の1をしめるほどの広さだが、悲惨な状態にあった。雨期の洪水と乾期の水不足に悩まされる不毛の土地にひとしかった。

石川県に生まれ、東京帝国大学で土木技術を学んだのち台湾総督府に赴任した八田與一(1886～1942年)は、現地を調査して工事計画書を提出した。それは、嘉南平野の上流の川

をせき止めてダムをつくり、安定して水を供給する灌漑施設をつくるというものだった。

工事は困難をきわめた。ある日のこと、石油ガスの爆発がおこり、50人あまりが死亡する大惨事となった。八田は「もう私のいうことを聞いてくれる人はいないだろう」と嘆いたが、台湾の人たちは「事故はあんたのせいじゃない。おれたちのために、台湾のために、命がけで働いているのだ」と逆に八田をほめました。

1930年、10年がかりの世紀の大事業は完成し、嘉南平野は緑の大地に生まれ変わった。アメリカの土木学会は、「八田ダム」と名づけ、世界にその偉業を紹介した。

図—4

地碑を建立し除幕式を行い、嘉南農田水利会から遺品をお借りして金沢市が主催してふるさと偉人館で資料展を開催するとのこと。さらに、日本の劇団「昴」と台湾の人たちによって、八田技師の生誕120周年記念公演の演劇を、金沢市及びこの会場（嘉南市）で行うと約束した。心地よい一日が終わった。

(12) 民族を超えた土木技師

人びとの生活にゆとりの時間を生みだすことに土木の意味はある。其の言葉を体現すべく嘉南の農民のために生きた土木技師は、「国籍・民族を超えた存在になっている」と銅像前で思った、と司馬遼太郎は台湾紀行で書いている。

まさしく今回現地に来て、農民の人たちの思いを感じ取って帰りたいと願って来た旅であったが、この八田技師の偉業によって60万農民の生活が豊かになったのだと講演で語られた。台湾では1997年から中学校の教科書に載せ、広く知らせている。一方わが国では、やっと今年(2006)から、中学校の「新しい歴史教科書」(扶桑社)に上記の記事が載った。

太平洋戦争の末期、日本じゅうの銅像のほとんどが、

国家による金属回収という命令で撤去された。このとき、この銅像も供出の運命に遭ったが、戦後——中華民國の世になってから——烏山頭に近い番子田駅の倉庫に放置されているのを、嘉南農田水利会の職員が見つけた。

水利会の人びとは大いに喜び、これを烏山頭に持ち帰った。が据えることは、憚られた。中華民國が島内から日本色を拭き取ることに懸命になっていた時代である。蒋介石の勇姿が銅像としてさかんに建てられている時代に、現場作業員の姿をした日本人の銅像をすえるなど、とんでもないことだった。

一人の日本人技師の銅像が、烏山頭水庫(烏山頭ダム)の小高い丘の上から台湾最大の人造湖、珊瑚潭を見下ろしている。貯水量1億5千万トンの巨大なダムと、万里の長城の6倍という1万6千キロに及ぶ給排水路を設計し完成させた、若き土木技師八田與一の姿である。

(以下、次号)

2006年5月27日 記

J|C|MA

[筆者紹介]

川本 正之(かわもと まさゆき)
社団法人日本機械土工協会
技術委員長